

第318回くらしの植物苑観察会 令和7年12月20日(土)

「名前からひもとくサザンカの伝播」

加地 典子氏 日本ツバキ協会

植物の漢字は仙人掌(さぼてん)、無花果(いちじく)、石榴(ざくろ)、羊歯(しだ)、蒲公英(たんぽぽ)、躑躅(つつじ)、団栗(どんぐり)など読むのが難しいものが多く見られます。よく知る植物はこんな漢字だったのかと驚くことも多いのではないのでしょうか。サザンカの漢字は山茶花。知っている漢字ですが、そのまま読むとサンサカとなり読むのが難しい難読漢字です。なぜこの字をサザンカに充てたのか私には疑問でした。中国では椿のことを山茶と書きます。日本と中国は文化、貿易などで昔から交流があり、昔の知識人は山茶が椿のことであることを知っている方が多かったと思うからです。

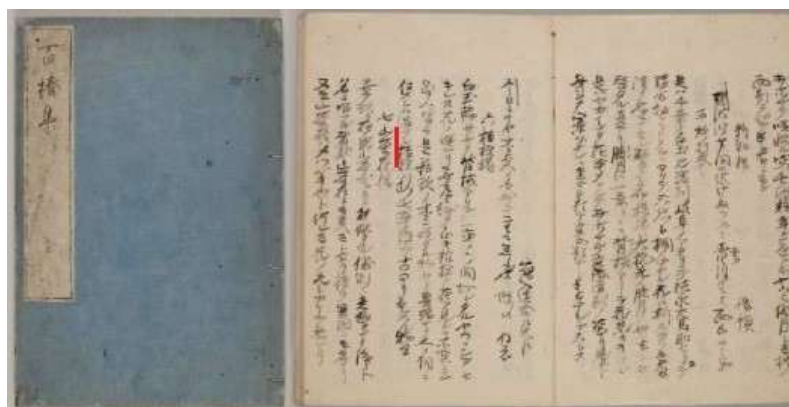
サザンカが書籍に現れるのは江戸時代に入ってからになります。ツバキが700年代の「日本書紀」や「万葉集」に見られるのに対して、サザンカがここまで遅くなったのには自生地が九州や四国の一部に限られていたためだったと考えられます。1605年の「古田織部茶書」で初見が見られると、次いで1630年安楽庵策伝による「百椿集」に山茶花という名前が見られます。古田織部と安楽庵策伝はどちらも茶人で師弟関係にあります。



安楽庵策伝の書かれた誓願寺の扇子

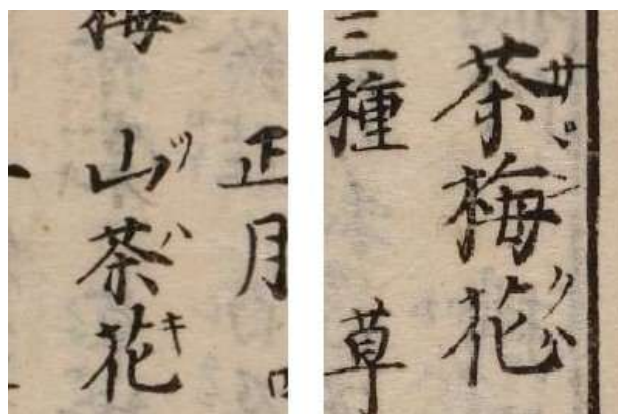
サザンカの発音は中国でツバキを表す山茶、山茶花のサンサカが訛ったものとされています。文献に登場する時期から見ても伝播し始めた時代は室町時代末期から江戸時代初期だったと考えられます。この時代は茶の湯が流行し、中国由来のものは唐物として珍重されていました。唐物と勘違いされた方が、サザンカにとって良かったかもしれません。

江戸時代中期になると1684年の「立華正道集」、1695年の伊藤伊兵衛三之丞と花の専門書などに次々記載が見られるようになります。この2つの書籍では茶山花が使われています。「立華正道集」では華道家、「花壇地錦抄」は園芸家によって書かれたものです。漢字の順番を変えることで素直にサザンカとなります。植物の専門家の中でサザンカの名前が定着し始め、素直に読める茶山花に変更を試みたものと考えられます。



安楽庵策伝「百椿集」の山茶花の文字と「立華正道集」の茶山花の文字

江戸時代中期には本草学という学問が盛んになります。本草学とは東洋の博物学のことで、中国から伝来しその後日本で独自に発展しました。本草学は人の役に立つ情報、特に医学に役立つ情報を集めることを主な目的にしていました。本草学者に「養生訓」で有名な貝原益軒という人物がいます。貝原益軒は1694年に正月から12月まで月毎に咲く花を「花譜」にまとめました。この「花譜」では山茶花にツバキのルビをふり、サザンカは茶梅としています。中国の文献にあったツバキの1種茶梅をサザンカと考えたためです。これは本草学は中国から入ってきたものであり、中国では椿は山茶と表すことからこのように考えたものと思われます。しかし、中国の江戸時代より前の文献には茶梅の文字はなく、逆に日本の江戸時代の文献を参考に茶梅がサザンカであるとしています。中国ではサザンカの漢字は現在でも茶梅です。明治のサザンカの栽培家である芦沢弥五郎もカタログを「茶梅大全集」としています。



貝原益軒「花譜」の山茶花と茶梅

こうして見てみるとサザンカの漢字は何度も混乱が生じていることが分かります。椿と違って身近にある植物ではなく、船によって運ばれ、伝播された植物であったことが関係しているのではないのでしょうか。

.....

次回予告 第319回くらしの植物苑観察会 令和8年3月28日(土)

「くらしの植物苑の地衣類2」

坂田 歩美 氏 (千葉県立中央博物館 研究員)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要

1月、2月の観察会
はありません。